



未来を変えた時間/
First Through Time
/レックス・ゴードン
(森川かおる訳) /
書店(4/15刊・¥980)

レックス・ゴードンの長編『宇宙人フライデイ』（これが代表作）が、日本で出版されてから、もう二十年以上たってしまった。したがって、アメリカでは、その六年後に出ている本書が、十六年遅れて訳されることになる。粒子加速機の実験が、タイム・マシンの原理を、ほんの偶然から発見する。ところが、未来に送り出されたカメラは、瓦礫と化した実験施設を写し、帰ってきた。ハワード・ジャージエンは、真相を探るため、未来へと出発する。そこで、彼の見たのは、ミュータントの占拠する都市だった。

——はたして、この明日を別のものに変えることは、できるのだろうか。

典型的な未來描写、第三次大戦後の世界といったところ。発表当時は、核戦争ものがいくつも書かれている。しかし、ここには、そういう深刻なムードはない。タイム・マシンの扱いにしても、ウエルズのものと、ほとんど同じである。

ただ、時間の可塑性についての議論や、主人公がミュータントにつかまり、種馬がわりにされそうになつたりなど、あえていえば、怪作になるのだろう。（後）